

関西大学 経済・政治研究所

【講演】

総合情報学部講演会

COVID-19下の観光、イベント、そして万博

講 師：井出 明氏（金沢大学国際基幹教育院准教授）

日 時：2020年12月22日(火) 13:00~14:30

会 場：関西大学高槻キャンパスE棟 TEホール（講師はオンライン接続）

進 行：岡田 朋之（エキシビションとツーリズム研究班 主幹）

2020年7月に開催された共催シンポジウム「ポスト・パンデミックにおける博覧会とツーリズム——2025大阪・関西万博でICTに期待されるもの」の後、12月に開催された博覧会愛好家の二神敦氏の講演会に引き続き、同じシンポジウムにおけるパネルディスカッションのパネリストとして登壇された井出明氏を、総合情報学部の学部講演会にお招きした。井出氏の講演は、先のパネルディスカッションで展開されたCOVID-19によるコロナ禍とそれ以後の博覧会のあり方についての議論を、観光の今後とも結びつけてより深化させることで、本研究班のテーマについて多大な示唆をもたらすものとなった。それゆえ、本講演自体は研究班の主催もしくは共催によるものではないが、研究班主幹の岡田が企画、開催し、当研究班の扱う領域と深く結びついた講演の記録として、本書に掲載するものである。

はじめに

私のプロフィールは、こちらにある『エンタープライズ』というウェブマガジンのところに、新潟大学の鈴木（正朝）先生という方が詳しくインタビューした記事が載っていますので、これをご覧くださいと思います。

<https://enterprisezine.jp/article/detail/12516>

本日の内容ですけれども、コロナ禍における現状の社会がどうなっているかということ、まず意識を共有した上で、そのあとで観光の世界でどのような変化が今は求められているのか

というのを見ていきます。それで岡田先生がご専門とされている万博の話をしてから、まとめに入っていこうかと思えます。

1 人が動けなくなった社会

現在、どういう状況かという人が動けなくなった社会なんですね。私も今日はそちらに伺いたかったんですけども、不要不急の外出は自粛してください、不要不急の出張は自粛してください、オンラインでできるものはオンラインでということで、許可が出なかったとか、自粛なので最後はご自身でご判断をということで、限りなく強制に近い任意で、外に出られないという状況があります。ただ単に、外に出られないというだけではありません。地方では特によそ者の排除とセットで、外出ができない社会というのが出現しました。4月の下旬に日本が緊急事態宣言に閉じ込められていた中で、岡山県知事は「来たことを後悔させてやる」ということを、堂々とマスコミとの記者会見の中で言っていましたし、岡山県知事の発言というのは、別に彼が特別変なことを言っているのかということ、当時地方自治体の首長さんたちは、こういった発言をされる方が結構多くて、徳島県知事は徳島県に入ってくる車のナンバーをチェックするとかと言っていましたし、和歌山県知事も長野県知事も、都会からの来訪者を歓迎しないということをはっきり言っていました。あと私の住んでいる金沢でも、都会のナンバーの車はいろんなお店で追い返されたりということもあったりして、都市住民に対して地方の人たちが冷たいという状況が生じていました。

もともとは都市と地方との交流によって、新しい社会をつくっていかうとか、都市と地方の交流によって地域イノベーションを達成しようとかいわれていたんだけど、実際にコロナがまん延する社会になってみると、都会から地方に行く人が単なる金づるのように過ぎないことが露呈してしまって、言われた側としてはかなり長期にわたって心の傷が残るわけですね。そうすると、ワクチンが開発されてコロナという病気自体が過去のものになったとしても、都市住民の人たちが負った心の傷というのは当分治らないんじゃないかというのが、私の今の関心事ではあります。

特に軽井沢は、傷が割と深いと思っております、軽井沢というのは都市の住民にとって別荘地であり、ある意味都市でつらい生活、しんどい生活を送っている人たちのバッファとしての役割を長いこと持っていました。都会で一生懸命働いて、心の安らぎを求めて別荘地で週末を過ごすというのが、軽井沢での過ごし方だったわけですけども、4月、5月は軽井沢の地元のスーパーに都市住民が来ることを地元の人たちが非常に嫌がっていました。軽井沢町というところは非常に豊かな自治体で、なぜ豊かかということ固定資産税が、実は軽井沢町には非常にたくさん入ってくるんですけども、別荘地なんで別荘に対する固定資産税というのは、自分が住んでいる住宅に対する税金よりも基本的に高く設定されています。制度的には月に1泊

以上すれば固定資産税を減免する仕組みはありますが、富裕層は意に介しません。つまり、税金は軽井沢町が取るだけけれども、普段そこに住民が住んでいないので福祉とか、ごみとか、下水道とか、そういった衛生の仕事もあまりたくさんなくていいので、税収の割に支出が少なくていいということで、軽井沢は非常に豊かな町なんです。

けれども、いざ都市住民が軽井沢に避難しようと思ったときは、軽井沢町は税金をたくさん納めていてくれていた都市住民を歓迎しなかったんです。軽井沢みたいな町は別荘族の人が避難してきたら、買い物には出てほしくないけれども、食料の宅配なんかは町のほうでちゃんと手当てをしますみたいなかたちで、都市住民と町とのいい関係を維持すべきだったんでしょうけれども、そういったことを何もやらなかったというのは、かなり問題だと思っています。

2 都市と地方

都市と地方の関係ですが、もう少し詳しく見ていきましょう。従来、建前上、都市と地方は相互補完性を持っていると考えられていました。ぎすぎすした社会である都市でばりばり働いて、それを癒やして地方に休みに来るとというのが、理想的な関係だというふうに思われていたわけです。しかし、現状は申し上げたとおりコロナのせいで大きな対立構造ができてしまっています。東京とか大阪みたいな都市部と、私が住んでいる富山や、職場の金沢などの地方という「2つの日本」が発生してしまっているのです。私はコロナの社会が到来するまでは、都市と地方というのは、都市から地方に向かってだんだんと田舎に向かっていくというかたちで、もっとグラデュアルな社会だと思っていました。ですが、実際に今は田舎に住んでたまに都会に行って戻ってくるだけでも、言い換えれば東京に出張に行って帰ってくるだけでも、「そんな危険なところに行ったのか」という感じで驚かされてしまって、あんまりグラデュアルじゃないんですね。県庁所在地の富山市とか金沢市でも、東京に行くことを非常に恐れ、とがめる風潮がありまして、都市と地方というのが段階的に田舎になるというよりは、大都会とそれ以外という二分法的な存在に今はなってしまうと思います。

その中で日本という社会がどうなっていくのかというと、現状は新しい東京中心主義が生まれていると思っております。どういうことかということ、東京に住んでいないと、東京の人に会えないんですね。金沢とか富山に住んでいて出張で東京に行く、ということが今はできないので東京の人に会う方法がないんです。今日のイベントは大阪でやられていますけれども、本来ならば終わった後に、岡田先生とか2人とも仲良しの古賀（広志）先生なんかと高槻の飲み屋で一杯やろうかという話もあったんですが、それもできなくて今日は講演が終わったら岡田先生にお礼を言って、インターネットを切断したらそれでもう交流も終わってしまって、ZOOMだと飲むこともできない。岡田先生と会おうと思っても、リアルでは会えないというわけで、そうすると生のいい情報を入れようと思ったら、東京や大阪といった都市に住んでいないとい

けないことになります。インタビューやZOOMで出回る極めて公式な話しか聞けなくなってしまって、非公式な話が田舎にいと余計聞けなくなってしまっている。もう行くことができないので、生の岡田先生の言説や古賀先生の言説にはタッチできないといったフラストレーションを今は感じております。

田舎の大学というのがどういう状況かという、うちの大学も似たようなものなのですが、愛媛大学はホームページにその大学のレギュレーション、規制を明確に掲示しています。これはなぜかという、愛媛大学は実はコロナの割と初期段階で、学生さんのクラスターが発生してしまって、地域住民がものすごく不安を覚えたので、大学としては教職員の就業に関しては、このようなレギュレーションをしていますということをホームページで告知しているのだと思います。特別指定地域の出張研修については原則禁止。要するに愛媛大学の先生は東京や大阪に行っちゃいけないわけです。緊急かつやむを得ないと判断した場合は、許可することがあるけれども、基本的に東京や大阪は行けないと。じゃあ東京や大阪の人が会いに来てくれる場合はどうなのかという、実は会うことも基本的にできないんですね。「指定地域から来客者との打ち合わせについては、その必要性を十分に精査し、緊急かつやむを得ない場合を除いて自粛してください」とあります。「特に特別指定地域、東京とか大阪からの来客者との打ち合わせは強く自粛を要請します」というので、基本的に会うなど言っているわけです。これは愛媛大学が教職員に向かって出している規制なんだけれども、ホームページで広く公開している意味というのももう一度考えてみましょう。これは地域社会に対して、愛媛大学という東京とよく往復する職業の人たち——大学教授って出張が多いから、東京とよく往復する種類の人たち——がこういう規制の下で仕事しているから安心してくださいというメッセージ性も含んでいます。

ですから、地方の住民の都市への恐怖感というのは、このぐらい強いものだというのを、こういうもので認識していただきたいと思います。

次にメディアについて考えていきます。北日本新聞という富山県の地元紙、京都府でいえば京都新聞とか兵庫県でいえば神戸新聞みたいなものですがけれども、感染者が出ると、その関係を図解化して、それが普通に新聞に載るんですよ。北日本新聞という富山の地元紙に、誰と誰がどういう関係で感染しているかとかですね。会社員、息子、小学校、娘とか、こういうのが全部載ってきますので、田舎において基本的にプライバシーはありません。コロナに感染したことによって、今まで隠していた人間関係が突然明らかになったりして、プライバシーが暴かれるという点では、田舎は非常に恐ろしいものがあるわけですね。

コロナに感染したくないというのは、こういう系統図というか、関係図の中に突然自分が入ってしまった、自分の人間関係が地元の新聞に載るのがやっぱり恐ろしいので、それで絶対コロナにかかりたくないという話になるわけです。換言すれば、「コロナの人は入ってくるな」というのを強く意識させる新聞の記事だと思います。これが地方の状況だということで、都会に

住んでいる皆さんに、われわれ地方の人間の意識を共有してもらうために、お話をさせていただきました。

3 新型コロナウイルス流行後の観光の動向

(1) マイクロツーリズム

だんだん本題に入っていきます。新型コロナウイルス流行後、観光の実務の世界はどうなっているのか、ここから話をさせていただきます。一番痛手を負ったのはインバウンド、海外から日本に来る観光客の壊滅的状况でして、去年は3,200万人ほどいましたけれども、現在は観光で入ってくる人はほぼゼロなので、えらいことになっているわけですね。日本の観光産業自体が壊滅したのかというと、これは解釈がちょっと難しいところがあるんです。どういうことかということ、インバウンドに頼る割合というのは、日本の観光産業全体の中では2割ぐらいしかなくて、もともと内需が8割だったんですね。海外から来る人が日本の観光経済で回してくれているのは、一番大きかった去年ですら2割ぐらいなんで、実はこれがすぽっと抜けても、何とか他で補うことができるといわれているんです。当然、影響の大きかった地域もあります。外国からの大型クルーズ船を寄港させて、お客さんが降りて、買い物をして食事をするなどの割合が大きかった佐世保港周辺のような観光圏、観光地のエリアは、インバウンドが入ってこなくなったことによって非常に厳しい状況になっています。あと皆さんとなじみの深い大阪の難波とか、あの辺りのドラッグストアとか家電量販店なんかは、インバウンドが入ってこなくなったことによってかなりきつくなっていますが、全体としては2割減ったというわけですし、2割分を何とか国内の需要を喚起することによって補えないかというのが、今の観光事業者の思惑なわけです。

そのような動きの中で、(2020年)5月に星野リゾートという大きな観光事業者がマイクロツーリズムという概念を提唱しました。社長の星野さんという方は、非常にご見識のある方で、この方は日本では慶應を出た後、ご自身が軽井沢にある名門旅館の後継者だったので、観光学の世界では大変権威のあるコーネル大学のホテル学の大学院で学ばれて、ご実家を継がれたそうです。ご実家の業務形態を近代化させて今の星野リゾートにしたんですが、この方がおっしゃるにはコロナ禍が観光産業にとって実は逆にチャンスでもあると。というのは、私も去年クリスマスから大みそか、新年にかけてどこで過ごしていたかということとボストンで過ごして、パリで過ごしたこともあれば、タイとかインドネシアで過ごしたことがあるんですけれども、長期の休みを取れるのが年末年始なので、海外に行っていた日本人って結構いるんですね。海外に行っていた日本人がコロナで海外に行けなくなるから、これを取り込めば、富裕層の新しい顧客を開拓することになり、内需的にはチャンスだというふうにおっしゃっています。

あと、日本の労働システムとして、有給休暇の消化率が今まで少なかったんですが、現在は、

リモートワークが進んで旅先で仕事をするワーケーションの考え方も広がってきています。その結果労働者の休みが長くなる傾向になりますから、国内の観光産業的には実はチャンスなんじゃないかということをおっしゃっています。

マイクロツーリズムというのは、どういう旅かということこれは星野リゾートのホームページを見てもらうと、もっと分かりいいんですが、地域の知らない魅力を探る旅と、自分が住んでいる、皆さんだったら大阪府とか京都府、兵庫県なんかの自分ちの近所なんだけれども、今まで魅力をよく深掘りしなかったところを見に行き、それで地域の魅力を発見しようというのが、マイクロツーリズムの考え方です。

ただこれがうまくいくかどうかということ実はうまくいくところもあれば、うまくいかないところもあるような気はするわけですね。

星野さんはマイクロツーリズムという言葉を使っていたんですけども、私は前にMBS（毎日放送）の「ミント！」という番組に呼ばれたときは、安・近・短の旅から高・近・長の旅へというのを流行らせようと思って、一生懸命言ってみたんですがあんまり流行りませんでした（笑）。今までの国内旅行というのは安くて近場で短い旅行というのが、国内旅行の特徴だったんですが、これからは富裕層が海外に行かなくなるので、コロナだから近くだというのはしょうがないけれども、高価格帯の旅行を長期間にわたって楽しむというわけで、安・近・短から高・近・長の旅に国内観光の質が変わってくるという話をしました。これで国内観光がうまくいくのかなというと、先ほど申し上げたようにうまくいくところと、いかないところがあるんですね。

星野リゾートは私もこの研究をやっているんで、泊まったことがあるんですが、うまくいくような気がします。1泊4万とか5万とかしまして高いですよ。高いんですけども、それだけの価値はありますよね。今まで得られなかった新しいエクスペリエンスが得られたということで、非常に得難い経験をした。普段では味わえない非日常の楽しみを体感、経験することができたというので、たまにはこういう旅もいいなということで、またお金をためて時間ができたら、リピーターとして来るということはあるんでしょうけれども、そういったレベルの高い観光業者だけではないんですね。

私が8月にマイクロツーリズムで実践してみたのは、私が住んでいる富山県高岡市から割と近い、富山県氷見市というところでして、これはGo Toトラベルで35%引きになりましたし、さらに富山県民割りというのがあってさらに半分ぐらいになりますので、1万円の旅行が実際に払うのが3,000円ぐらいで済んだんですね。それで近所のわざわざ泊まりに行きに行かないような場所に泊まって、過ごしてみようと思って過ごしたわけで、氷見って高岡から20～30分で行けちゃうんで、高岡市民にとっては泊まりで行くような場所ではないんだけど、補助金が出るから泊まってみようと思ってわざわざ泊まるわけですね。地方都市の典型ですが、土曜

日の午後の駅前はまだ全部シャッター商店街だし、ここは藤子不二雄 A さんの出身地でもあるので、『プロゴルファー猿』とか、『忍者ハットリくん』とか、そういったオブジェが幾つかあって、こういうオブジェがあっても1回写真を撮っちゃえばいいかなと、そういう感想を持つわけですね。

今までの観光開発というのが、どういうふうになされていたかということ、地方都市の観光開発というのは実はどこも似たようなものでして、おいしいものがあるってきれいな景色があって、親切な人々がいるという感じで、ここ10年ぐらい観光開発をやっていました。特にこの傾向が強くなったのは第二次安倍政権以降なんですが、地方創生のお金というのが地方自治体にガンガン降るようになりました。地域を盛り上げろというお金が降ってきて、それ自体は全然悪いことじゃないんですが、地方にお金を降らせても、実はこの地域をどうするかというグランドデザインを描ける人というのは驚くほど少ないんです。だいたい大学を出ている人もあんまりいないんで、その地域の外のことを知っている人もそんなにいない。そんな中で、役場にお金が降ってきてどう使っているかわからないということで、どうするかというと東京のシンクタンクとかコンサルティング会社に発注するわけです。投げるわけですね。

そうすると東京のコンサルティング会社やシンクタンクが、出張で何度かクライアントのところに行って、それでどういう名物があるかというのを調査して観光プランを立案するんですけども、そうすると日本中、今はどこに行ってもあんまり不味いものってなくて、不味いものって探して食わないと食えないぐらい今は珍しい存在だと思います。おいしいものって必ずどこにでもありますし、普通に飯を食べてもおいしいので、今の日本でまずいものを探すのが大変なんですが、観光パンフレットには「ここに行くとおいしいものが食べられる」というふうを書くわけです。景色も、国土交通省が頑張って景観保全もやったので、きれいな景色も日本中どこに行っても見られるわけで、わざわざ探さないと汚い景色もないわけです。親切な人というのは、今回のコロナで田舎の人って結構冷たいなのというのが分かってしまったんで、「親切な人」のところはちょっとクエスチョンマークがついてしまいますけれども、先ほど言った政府から降ってきた地方創生のお金が、都市部のコンサルティングファームに流れる中で、結局出来上がってくる観光パンフレット、観光の提案というのは、おいしいもの、きれいな景色、親切な人というので構成された金太郎飴みたいに類似した観光開発が成されています。だから、皆さんは梅田駅とかの大手旅行代理店のパンフレットが並んでいるところを見てもらうと、パンフレットのうたい文句が本当に似ているなって思うかもしれませんが、それは今申し上げたようなロジックがあるためです。

こういった地方の観光地にマイクロツーリズムで何回も行くかということそれは難しく思うわけです。

さて、次の話をしましょう。地方の温泉街に割とよくある業者として、最近多いのが湯快り

ゾートとか大江戸温泉物語というお客さんをたくさん入れて、バイキング形式のサービスを提供して、1人当たりの客単価を下げるとともに、たくさんお客さんを入れることによって、全体として見るとそこそこの利益が出ているというビジネスモデルがここ10年ぐらい流行りました。私自身は大江戸温泉物語とか湯快リゾートが好きでよく行っていたので、応援の意味を込めてあえて名前を出しますが、うちはまだ子どもが小さいので星野なんかは連れていけないわけですね。大江戸温泉物語とかだったら、皆さんの近くだったら箕面にありますよ。箕面に昔スパガーデンというところがあったんですが、その経営がうまくいなくなって、大江戸温泉物語に引き継がれました。そこは今私が申し上げている薄利多売型の安い価格帯で設定し、多くのお客さんを入れて、全体として利益を出すというビジネスモデルでして、ここは子どもが廊下で騒いでいようが、歌を歌っていようが、そういう場所なんだということで、家族連れにとっては居心地のいいところなんです。

そういったところが、コロナのレギュレーション、規制の下で従来の営業を続けられるかというところかなり厳しいものがあります。ソーシャルディスタンスを保たなきゃいけないので、レストランなんかには受け入れていい人数も減らされていますし、席も間引かないといけないし、これはお風呂なんかでもそうだし、卓球とかも全員ができるわけではないし、それに旅の楽しみとしてほろ酔い気分でカラオケを歌うというのがありますけれども、それも今はほとんどやらないですから、サービスとしてはかなり限定されたものになりますし、受け入れ人数が減ります。その中で利益を確保しなきゃいけないから、必然的に価格を上げていかなきゃいけないわけですよ。現状はGo Toトラベルがあるので、割と割安感があって泊まれるんだけど、Go Toトラベルの補助がなくなったときに、こういった低価格帯のところは値段を上げてしまった場合に、それでもお客さんは来て泊まるんだろうかという、かなり厳しいとおもっています。今は補助金がついて35%引きで泊まれるから安いなということで、お客さんが来ているけれども、補助金なくなった後に受け入れ人数に見合った適正価格まで価格を上昇させていったときに、こういった従来の薄利多売型でビジネスを展開していた業者さんが生き残っていただけるのか、かなり厳しいかとおもいます。

応援をしているので、何か活路を見いだしてもらいたいとおもいますし、先ほどの氷見の話なんかで私は近くに住んでいて思ったんですが、1回は行くでしょうけれども、リピーターになるかどうかはかなり難しい。というのは、1万円を使って何をやるかと考えたときに、近所の温泉に1回行ってしまうと、次に1万円を使って何をやるかというときにわざわざ行かない人もいられるでしょう。むしろ1万円でおいしいご飯をケータリングで頼んで、家でYouTubeを見て過ごすとか、そういった過ごし方をするかもしれない。安い温泉旅館なんかだと、他の娯楽との競合が起ってきますから、そうすると低価格帯のところは今後かなり厳しくなっていくことが予想されます。マイクロツーリズムが向くところと向かないところがあるわけですね。

(2) アートツーリズム

マイクロツーリズムが向かない観光形態として他に何があるかということ、アートツーリズムと呼ばれる観光もかなり厳しいといわれています。ちょっと具体的な話をしますと、私の仕事場は金沢なんですが、金沢21世紀美術館というのは、実は客の7割以上が県外観光客です。ですから、観光客なくして21世紀美術館というのは存立し得ないのです。こういった美術を愛好する人は誰かということ、高い教養を持っていてお金に余裕のある人が多いのですが、教養があってお金のある人はどこにいるかということ、それは取りも直さず東京にいるんですよ。都会の教養層の送客でアートツーリズムというのは成り立っているのです、現在のような都会の人間を歓迎しない田舎のメンタリティーで、アートツーリズムが成り立つかということかなり厳しいものがあります。

また、アートツーリズムで見に行くのは、美術館の他に芸術祭がありまして、例えば瀬戸内国際芸術祭とか、あとは大町でやっている北アルプス国際芸術祭とか、他に私が調べたのは新潟の越後妻有で大地の芸術祭、越後妻有トリエンナーレなんかも調べたんですが、どこも全て東京からの送客によって成り立っています。こういった現代アートを楽しむのは、都会の教養層でお金持ちが多いんですが、こういった芸術祭が成り立たせているアーティスト、作家は誰かということ、これは日本人のアーティストだけだと作品がカバーできないというか、目玉になる非常に有名で著名なアーティストを海外から連れてきて、そこで長期滞在してもらってインスタレーションと呼ばれる美術作品を作ってもらいます。海外の作家さんと呼ばなきゃいけないんですが、現状は海外の人を呼んで滞在してもらおうということが、コロナの関係で不可能なので、そうすると外国人の大先生が来ないのでイベントを打ちにくいという問題点がありまして、日本人作家だけでとてもカバーできないので、こういったアート関係の観光は非常に厳しいかと思いますね。

(3) 出張と兼観光

あと出張に関して言うと、私が今はそちらに行けないということからも（わかるように）非常に戻りが遅いと思います。在宅勤務同様、（出張には）行かなくても大丈夫だということが、企業においては判明してしましまして、今まで月に1回例えば第1月曜日の朝は、全国支店長会議みたいなことをやっていた企業があったとしても、コロナ禍においてオンラインで別いいじゃんということが分かってしまったんで、そうするとわざわざ業務のやり繰りをつけて東京に行くなんていうことをしなくなるわけです。

在宅勤務が進んだこともあって、会社で働く人というのは相対的に減ってきていますが、これと観光と何の関係があるのかということ、旅行業者の大きな収入源の1つに、企業の出張の差配というのがあるんですね。私が働いている金沢大学には日本旅行が入っていて、これは全然

オープンなデータなんでも言いますけれども、北海道大学なんかはJTBが入ったりしていますけれども、金沢大学だったら1週間のうち数百人が今まで東京と金沢を移動していたわけですよ。出張手配の手数料で大手旅行代理店は大きな収益を上げていたんですが、これが激減しましてすごく大変そうなんです。出張の戻りは遅いですし、出張に行く人がいないと実は観光事業者にとっても影響が出るんです。日本人独特の観光形態なんですけど、「兼観光」という言い方があるんです。これは日本人の特に中年男性に多いんですけども、大阪に業務の出張で行って、会議が3時ぐらいに終わったから、このまま帰るのも何だからついでに何か見ていくかというときに、大阪城が割と近いじゃないですか。大阪城は梅田から近いから、大阪城をちょっと見てスマホで写真でも撮って、たこ焼きでも食べて帰るかというんで、業務のついでにちょっと寄るといのが兼観光の定義になります。これがやっぱり出張の激減に伴って比例的に減少していくわけですし、出張とそれにまつわる兼観光も減っていくというふうにいわれています。

(4) MICEの壊滅

あと、MICEと呼ばれる観光事業の形態、Meeting、Incentive travel、Convention、Exhibition、Eventとかって書いてありますが、大規模国際見本市みたいなものです。大規模国際見本市みたいなものは、コロナの関係ではほぼ中止です。大阪に住んでいる皆さんは、維新の会がカジノの誘致をしようと思って戦略を練っていたのはご存じだと思いますけれども、私は思想的に左派の割に珍しくカジノには賛成している人間です。カジノというのは国際会議を誘致するときに絶対必要なんです。国際会議を誘致するというと会議をやっているだけじゃなくて、海外の場合は国際会議に配偶者とか子どもがついてくるパターンが結構多くて、会議に参加しなきゃいけない人は参加していて、その間は配偶者が暇になりますから、暇の間に演劇を見たり、オペラを見たり、ミュージカルを見たりとかという感じで、劇場で時間をつぶすことも多いですし、子どもが喜ぶようにプールなんか完備されているような会議場もあります。

ラスベガスというところは、カジノのイメージがあるかもしれませんが、ラスベガスは現在カジノへの依存度は25%ぐらいだといわれていて、国際会議をやってコンベンション、見本市の上がりて食べている町なんです。国際会議を誘致するには、会議に参加する人以外の家族がどう楽しめるかとか、あと会議に参加する人も夕方以降ゆったりとした時間をどう過ごしてもらうかというときに、気分転換にカジノでもやらしてもらおうということで、カジノがあることは国際会議誘致の際の大きなポイントになります。国際会議をどこでやるかで複数の都市が立候補をしたときに、カジノのあるなしが点数の差に出てきて、それで日本が競り負けるということが実際にあります。アジアで今は大型の国際会議をやらうとすると、日本の他に韓国も手を上げるし、香港とか、シンガポールとかその辺り、さらには上海も上げますけれど

も、シンガポールとか、韓国なんかが強いののはカジノがあることです。夜の社交ができることで競り勝つことがあるので、カジノがあったほうがいいですね。

国際会議を誘致するとどんないいことがあるかという、例えば医学系でも皆さんが勉強しているIT系でもいいんですけども、医学系の権威のある国際会議が大阪に来るとか、IT系の権威のある国際会議が横浜に来るなんていうことになると、日本には世界最先端の知識と知恵が集まってくるんだというイメージがついてきます。頭のいい優秀な人たちがどんどん日本に来て、その人たちが日本で会話をして滞在して、お話をすることで彼ら同士がインスピレーションを与え合って、インスパイアし合って、日本がイノベーションの発信拠点になっていくんですね。だから、国際会議を誘致するということは、その分野の世界最高水準の頭脳を集めて、そこで無駄話とか世間話をしてもらう。それはカジノの場でもあるし、バーとかもあるんだけれども、そこで新しいインスピレーションを得てもらって、その業界のイノベーションをどんどん達成してもらおうと、日本のプレゼンスが上がるのと同時に、日本に行けば新しい情報が手に入るということになり、日本の産業競争力も必然的に上がっていきます。ですから、MICEを呼ぶというのは重要なことなんですけど、これは現状かなりきついなってなっています。ヨーロッパの状況が今は深刻なので、今後かなり長期にわたって苦戦を強いられると思いますし、万博やオリンピックを開催できるのかということのも、MICEの現在の状況を見るとかなり厳しいものになっていくような気はします。

4 万博

(1) 人が来ない万博

オリンピックは来年ですけども、万博は5年後なんでちょっとここからは万博の話を持ち下げてみることにします。5年後はどうなっているか分かりませんが、人が来られない可能性もあるわけですね。リアルでは集まりにくい可能性はあります。海外からはコロナの関係で来にくいと思いますし、国内客が主力ですが、私のように事実上の移動制限がかかっているケースもあるので、多くは見込めないかもしれません。海外からはあんまりお客さんが来てくれないから、インターネット上の博覧会に頼らざるを得ないかもしれない。

(2) インパクの再検討

インターネットを使って万国博覧会をやったことがあるのかという、万博という名称ではないですが、インパクというインターネットの博覧会が、20年ぐらい前に開催されたことがあるんですよ。もう亡くなりましたけれども、大阪万博の立役者だった堺屋太一さんが音頭を取りまして、2000年前後なんでまさにインターネットの黎明期、これから爆発的に普及することが予想されたので、インターネット上で博覧会を展開しようということで、インパクという

のをわざわざ経済対策の閣議決定までやって展開してみたんですが、あんまりうまくいかないんですね。予算も幾ら使ったのかよく分からないところがあって、私もいろいろと調べてみたんですが、最後のほうに参考文献も上げてありますけれども、あんまりはっきりしないところがあって、経済波及効果がどのぐらいかというのもしっかりはっきりしないんですよ。インパクトというのが成功していれば、情報社会論とか社会情報学の教科書にも載って、後世に受け継がれていたんでしょが、触れてはいけない黒歴史みたいになっちゃって、公式の文書もほとんどなくて、その意味からはインパクトは成功と言い難い気がします。

博覧会であれば、例えば大阪万博の時のように、ちゃんと国立民族学博物館ができて、太陽の塔も残って、やった後の財産というのが後世に引き継がれたわけですけども、インターネット博覧会のはもはや URL も消されてしまって、インターネット上にその痕跡を見つけることすら難しい。私がウェブの記事から当時の URL を探し当てて、そこからインターネットアーカイブを検索する Way Back Machine というウェブサイトについて URL を打ち込んで、それで見つけた画像から全体の構造を推定してみました。まずトップページとして入り口があって、そこから各パビリオンに入って行って展示を見るというのがインターネット博覧会の構成でした。パビリオンの数自体は結構あって、特定テーマパビリオンとして政府機関と地方公共団体、企業等があって、あと個人もそのパビリオンを出展できたので、最終的には500以上あったといわれていますけれども、アーカイブも資料もほとんど残ってなくて、今はインパクトに関わったということをちゃんとしてくれる人もなくて、当時のアンケート結果なんかを見ると、あんまりうまくいかなかったというのが多いんですね。

大阪万博がどのぐらい成功したかというのを、数字で語るのはすごく現実的、具体的ではあるんだけど、大阪万博のようなイベントが成功した場合、私が「あれオレ詐欺」と呼んでいる、「あのイベントを仕掛けたのは俺だ」と言う人が山ほどいるわけですね。「あれをやったのは俺だ」という人が多いイベントというのは、大成功と言えるわけです。横浜の赤レンガ倉庫ってありますけれども、あれは横浜にあった最初は廃墟化していた単なる倉庫だった赤レンガの倉庫をリノベーションして、おしゃれな観光施設として生まれ変わらせて、都市のアートプロジェクト型再生としているんな教科書に載っていますけれども、特にお互い知り合いでもないのに私が知っているだけで「あれをやったのは俺だ」と言っている人が5～6人いますから、そういうプロジェクトというのは大成功なわけです。

大阪万博もあれをやったのは俺だという人が山ほどいるので、非常にいいプロジェクトであったことは分かるわけですね。ところが、インパクトの場合はあれをやったのは俺だという人が誰もなくて、そういうのは失敗したプロジェクトということになるわけです。何で失敗したのかという話なんですけど、回線が当時 ISDN といって皆さんにとってはもう古い、20世紀、前世紀の話になるわけで、生まれる前の話だという人も多いでしょうけれども、64kbps とか128kbps

しか出ないような回線に対して、コンテンツが重くてちゃんと見られなかったという意見もありました。あと実はウェブジャーナリストの方とか大阪観光大の研究者の先生とか、そういった方が書かれている説なんですけれども、インターネットの特性をちゃんと生かしていないんじゃないかという意見が出てきまして、結局インターネットの力を使って何をやりたいのかよく分からなかったという意見をおっしゃっている方もいます。また、従来の博覧会をインターネットに置き換えただけで、インターネットが持っているいつでもどこでも見られるというような仕組みがあんまり使われなくて、時間的に同じ時間で同じことをやれということを強要したのがまずいんじゃないかとか、そういった説を唱えていらっしゃる先生もいらっしゃいます。

今はインパク、インターネット博覧会をやれば成功するのでしょうか？ たしかに現在はブロードバンドが普及していますから、コンテンツが重いということはずまないでしょうし、インターネットとは何かという理解も進んでいますけれども、単純に今やればインパク、インターネット博覧会はずまくいくのかというと、実はそう簡単でもないだろうというふうに思っています。

インパクの失敗というのは、博覧会とは何かという博覧会の本質を分かっていたいなかったからではないかと思っております、博覧会というのはどういう存在なのかというと、これは実は岡田先生の講演された吹田市の博物館が、今はバーチャルミュージアムとして閲覧できまして、博覧会とは何かというバーチャル展示をやっているのも、もし関心を持たれた方はスマホでいいので、吹田市の博物館につないでもらって、後でご覧になるといいかと思えます。

(3) 博覧会の本質

もともと博覧会というのは、19世紀末から20世紀初めにおける国威発揚の場であり産業振興の場でもあったわけですね。だから、ビジネスプランナーなんかは博覧会にやってきてバイヤーとして目利きとして売れそうな商品を見たり、博覧会をやる側も植民地で採れるさまざまな産物売るために博覧会をやっていたりした側面がありますし、あとはそういった植民地をたくさん抱えているという自分の国の栄光を誇示するために博覧会をやっている面があって、その意味では博覧会というのは、20世紀初頭の近代主義、帝国主義の権化だったような側面があります。

ところが現在の博覧会というのは意味合いがかなり変わってきて、特に1970年代以降に文化人類学の人たちが、アフリカの奥地とか東南アジアの未開の人と思われる社会の中にもさまざまな文化あり文明があり、ヨーロッパの文明というのが必ずしも進んでいるというわけではなく、地域ごとに異なった文明が併存しているんだ、という考え方になってから、ヨーロッパ文化の先進性なんかをことさら強調するような博物館展示もなくなりまして、万博に関しても非常に相対化され、近代文明の問題点をえぐるような展示というのも海外の万博なんかでは増

えてくるようになりました。近代文明を批判的に扱うというのは、ポストモダンという考え方でして、万博というイベントの成り立ちは確かに19世紀末から20世紀初めのモダンにあるのだけれども、現在では近代の帝国主義的な価値観を批判するポストモダンの要素があるというのが、現状の博覧会の大きな本質の1つになっているわけですね。

あと同期性は必要なのか、同時に何かをやるということは必要なのかというと、博覧会というのはやっぱりお祭りの要素があって、みんなで一緒に楽しむというそういった要素はありますので、これが20年前のインターネット理解との大きな差だと私は思っています。20年前のインターネットの理解というのは、インターネットは非同期の世界だといわれていたんですね。私が夜中の3時に誰かにメールを出しても、その人はその人の都合で見たい時間にメールを見られるから、インターネットの本質は非同期、時間に拘束されないというふうにいわれていたんですが、現在はインターネットの世界が極めて同期的な世界に変わってきました。典型的なのがLINEです。LINEにメッセージを夜中の3時とかに送ったら、見て既読がついてしまったら返信しなきゃ悪いんじゃないかということで夜中に送信するということが、相手の人にプレッシャーを与える状況になってきました。そこで、学生にメールを送るのも、2000年前後だったら夜中にメールを送っても、学生もパソコンを開いてから見るので、学生さんにとって特にハラスメントでも何でもないと言われていたんですが、今は学生さんがメールを携帯に転送して見るので、夜中にメールを送るとハラスメント案件になることがあるから、気を付けてくださいという研修を、大学業界全体が受けるようになってしまいました。つまり、今ではインターネット社会における同期性というのが強く意識されるようになってきています。

ジブリのアニメ映画で、ラピュタでしたっけ、バルスの瞬間にTwitterでみんなで同じ行動をすとかというような、同期の中で楽しむ、同じ時間帯の中で楽しむということが増えてきたので、やっぱりインターネットにおいて、20世紀の終わり頃に非同期だった社会が同期に戻ってきているといった大きな特徴があると思います。お祭りとしてみんなで楽しむということで、だからこそ大阪万博のときに大阪には行けなくても、大阪でやっていることと同じような楽しみを地方でも味わえるような連動イベントはやるべきだと思っています。そしてポストモダンの世界では、実は体を使って勉強する、体を使って学ぶということが非常に重視されていたので、インターネットを博覧会において活用したとしても、同時に何らかのかたちで体を使っていくということを考える必要があるかと思います。これは京大の総長をやられた尾池和夫さんが、毎日新聞で語っていたんですが、インターネットの勉強だけだと視覚と聴覚という2感しか使わないけれども、勉強というのは5感を使わなきゃいけないから、残りの3感をどう補完するのかというのが、今の大学教育の悩みだという話をされていました。私は、博覧会においても同じことがいえるかと思います。

(4) 2025万博への対応

2025年に万博が開かれることが決まっていますが、じゃあどういう方向に変わっていくかという、招致の段階で支持されていた松井（一郎）さんなんかの発言言説を見ていると、大規模なお祭りイベントのように認識されているんじゃないかと思うところがあるんですが、先ほど申し上げたとおり、20世紀の頃の万博と21世紀に関してやっぱり変化があるわけです。20世紀の特に初め頃の万博は、国威発揚の面が強かったですし、殖産興業の面も強かった。あと大阪万博の時代、つまり20世紀半ばちょっとすぎのときでも、明るく素晴らしい科学技術というふう考えられていたんですが、これは太陽の塔で皆さんはよくご覧になっていると思いますけれども、明るい未来に向かって太陽の塔は正面を向いています。けれども、過去の状況を表す太陽の塔の背面には黒い太陽が描かれているわけですね。科学によって明るい未来が開かれるというようなイメージが20世紀半ばにありましたけれども、現状はチェルノブイリとか福島とかで原発事故が起きましたし、あとはドローンなんかも世界的に見るとほとんど軍事技術として大量殺りく兵器として使われているわけですし、高度科学技術社会というのが必ずしも明るいものとは限らないという話を次の万博ではしていくべきかと思っています。

暴走する科学技術に関しては、皆さんもご覧になっている方が多いかと思いますが、南茨木駅の前に、ヤノベケンジさんが「サンチャイルド」というインスタレーションを置いています。これは原子力発電所の事故によって、防護服を着て事故に立ち向かわなきゃいけない人間がいるんだということを力強く訴えた作品なんですけど、福島で一時期展示されていたものが福島市民の抗議を経て今ではお蔵入りになってしまいました。南茨木に行けば普通にありますが、これは科学文明というものが必ずしもバラ色ではないということを問題提起した作品でもあります。去年のあいちトリエンナーレで展示されていた「ドローンの影」の作者のジェームズ・ブライドルは理科系の修士号を持っている現代アートのアーティストなんですけど、ドローンというのが先ほど申し上げたように、現在ではこれに爆弾とか銃をつけて、鉄砲の弾が出るような装置になっていますので、ドローンが上空を飛んでいるその影が地表に映るということは、これから大量殺害が起こるとかそういった恐ろしい意味合いがあるんだということを、この絵では示しています。

科学文明というのが負の側面を持っていることを強く認識した上で、現在コロナ禍ですし、コロナの社会から現代文明を再検討すべきではないかと、そしてこれを万博にも持ち込むべきだと私は思っておりまして、楽しいだけだとやっぱり本質が見えてこないわけですよね。あと体感性はやっぱりポストモダンの世界では非常に重視されますから、先ほども申し上げたとおり連動型のイベントというのはやったほうがいいのかと思います。大阪の会場で万博のイベントを何かやったときに、例えばどこか同じような時間に大阪と仲がいい姉妹都市なんかで、大阪の会場で食べているのと同じものが地方のサテライト会場で食べられて、大阪の会場で展示さ

れている展示品のレプリカがサテライトの会場にあって、そこで触って楽しむとかということで、たとえ行けなくても、そして遠くにいても一体感を感じられる連動イベントは必要かと思えます。

それから万博の場合は、外国の展示が多いんですが、今までであれば外国の様子を博覧会で感じ取って、その国に行ってみようという気になって、その国への誘客が図られていました。しかしながら2025年の万博では海外渡航がそれほど自由化されていないかもしれません。とすると、もうその外国には行けないのかもしれないので、外国に対する体験がそのパビリオンで完結するような展示にする必要があるかと思えます。行けないからこそ、他の代替物で楽しみを置き換えようとする人間の性^{さが}というのにはありまして、今はつぶれちゃいましたけれども、昔、奈良にドリームランドというディズニーランドのコピー、バッタものみたいなのがあったんですね。これは日本人にとってフロリダのディズニーランドに行くなんていうことは、未来永劫^{えいこ}できそうもないから、近所で似たような手近な代替品で、その娯楽を楽しもうという庶民の願いが知的財産的にむちゃくちゃなパクリ遊園地を生み出してしまったわけですけども、そういった行きにくいから代替物で楽しむというのは、これは割と庶民の素朴な願いであります。

遠く平安の頃も、熊野神社というと世界遺産になった和歌山県の本宮の熊野神社を思い浮かべるでしょうが、京都にもそして日本中の至る所に、熊野神社という名前の神社があって、和歌山の熊野に詣でることができない人向けに、熊野信仰が日本中の至る所で味わえるようになっています。行けないかもしれない以上、それを前提に代替物によって楽しめるような仕組みというのはつくっておく必要があるかと思えます。

あと2025年に万博が終わったら、はい、それで終わり、という話ではありません。前回の大阪万博というのは非常に大きな財産をわれわれに残してくれています。それは国立民族学博物館（民博）なんですね。松井さんが知事をやられていたときに、吹田の万博記念公園に視察に行くわけですけども、民博も見ていただいたのでしょうか？ 大阪万博というものがどのような遺産をわれわれに残してくれたのかということを考えたときに、当時の日本人にとってはあまりなじみのなかったラテンアメリカとかアフリカとかあいつた国々にも未知の文化があるんだということが分かりましたし、そういった会ったこともない文化や文明への畏敬の念を持つようになったというのも、大阪万博とそれに基づいてつくられた国立民族学博物館のもたらした大きな功績だと思います。沖縄とかつくば万博とか愛知とか、それなりに未来への遺産は残しましたが、大阪万博の影響というのはやっぱり大きくて、私も民博にはよく行くわけです。

今後2025年以降は何を残していくかということを考えたときに、先ほど申し上げたような科学技術文明というものが必ずしもバラ色のものだけではないということ、明確に認識できる

ような未来への遺産を残すべきだと思っています。単なるお祭りを超える成果を2025年以降に残さなくてはならないという観点からしますと、それは単に民博の収蔵品を増やすというだけでは不十分なように思います。外国の展示があったときにより深い相互交流するにはどうすればいいのか、そしてそれはコロナによって変わっていくのかということ、リアルタイムにみんな考えていく必要があるかと思っています。

5 まとめ

コロナによる変化というのは、いろんな意識の改革をもたらしまして、今はヨーロッパで第3波が非常にシリアスになっています。ヨーロッパから特にイギリスから今は飛行機が日本にほぼデイリーに近いかたちで飛んでいますけれども、その受け入れをどうするかというのを政府は再検討を迫られていますし、コロナ禍において、「みんな仲良く」、とは言えない国際社会が生まれてきています。ここ50年ぐらい特にEUの発展なんかを見てもらうと、EUは域内では関税がなくなりましたし、EUとほぼ加盟国が似ているシェンゲン協定というパスポートチェックなしで国境を越えられる仕組みに入っている国々の間では、コロナまで国境を意識することもなかったんですが、現在は国境を意識せざるを得ない状況になっています。ロックダウンが起こっている都市も多いですから、外にすら出られないわけで、国を越えるなんていうことは、余計に大変になってしまっているわけです。

そうするとドイツのメルケル首相なんかは、コロナの前は移民に対して開かれた社会、移民に対して暮らしやすい社会を標ぼうしていましたけれども、今はドイツ国民をドイツ政府が守るということで、国家と国民の関係を非常に強調したスピーチに変わってきています。1年前と比べ、ネーション、国民、国境という国家に固有の概念というものが復活してきて、これまで唱えられていたようなグローバル化とボーダレス化というのは、考え方を変えなきゃいけないかもしれないですね。その中でどのように国家の概念をわれわれは再構成すればいいのかというのが、私の悩みの種だったりしますし、万博を設計される方にはここは考えなきゃいけないところだと思います。

というわけで、コロナにより観光の意味自体が再定義されることになりまして、特に体を使って移動しなきゃいけない観光においても、東京から気軽に地方へというのが行きにくい状況が生じている。その中で観光というのはどういうものなのかを再度考える必要がありますし、これを考えると同時に万博の意味と内容も再定義される必要があるかと思っています。2025年の万博が、単に昔の大阪万博のコピーではいけないわけでして、コロナという人類共通経験を経て、万国博覧会をどう再定義するのかというのは、5年間で考えなきゃいけないことかと思っています。会場の様子が見られなかったのも、一方的なお話になってしまいましたけれども、いったんこれでお話を終わらせていただきます。ご清聴いただきましてどうもありがとうございました。

ディスカッション

岡田：ありがとうございます。インパクの話はなかなかまだまだ掘り下げていくと尽きなさそうですね。

井出：そうですね。関わった人にインタビューが取ればいいんでしょうけれども、関わった人を探すこと自体が困難のように思いますね。

岡田：本当に自分から口が開けないというのは、黒歴史なんですね。あと代替観光という話もありましたが、ある種今までの万博パビリオンって代替観光的な役割を担ってきたけれども、より強まるというふうに考えられるわけですね。

井出：今までは実際に海外に行くための橋渡しとして、万博とか博覧会が機能している側面があったと思うんですけども、実際にもう海外には行けなくなるので、万博の会場で海外に対する知識を得ることが完結する状況で設計する必要があるかもしれないですね。

総合情報学部なんで、少しITと観光の話もしておきたいんですけども、先ほど申し上げたアートツーリズムが今は全然成り立たないわけですね。都会のお客さんが地方の美術館とか、芸術祭に行けない。芸術祭自体も開けない状態で、じゃあどうするかというと、エルミタージュ美術館というところでは、日本の旅行会社と組んでオンラインによるエルミタージュ美術館のツアーというのをやっていて、エルミタージュの日本語ガイドがエルミタージュの中を回って、絵の解説を日本語でしてくれて1人1,600円。1時間ぐらいなんで、こういったエルミタージュの中を専門のガイドが日本語で案内してもらうのを、手軽に聞けるという意味では、これは新しい価値なんですけど、ビジネスとしてはそれほど盛況ではないと聞きます。また完全にオーダーメイド型の個人案内、マンツーマンの案内を頼んだとしても5,000円ですって、エルミタージュで個人の日本語をしゃべれるガイドさんを独占して、絵の解説をこっちのリクエストでこの順番で回ってくれと頼んでやってもらえるというのは今しかできないことなんで、その意味では新しい観光が作られつつあるんですけど、ビジネスレベルには育っていないそうです。新しい試みではあるんですけどお金にはなっていない。

日本だと富士美術館という八王子の美術館が同じようなことをやっています、この2つはお金を取っているからいいなと思うんですけども、日本の美術館、博物館で、オンラインイベントやるといった場合に無料のケースが多いんで、それはちょっとまずいかなと私は思っています。お金を取ってオンラインで情報を見せるということを積極的に展開していくべきでしょう。オンラインは無料だという意識がついてしまうと、ITを使ったイノベーション、まさに総合情報学部の皆さんが目指されているITを使って社会を作り替えていくということが難しくなるので、オンラインだから無料だという状況は外していくべきだというふうに思っていますね。

岡田：でも、今はオンラインツアーは結構いろいろと出ていますよね。知り合いでフィンランドのガイドの人はサウナツアーをやっていますけれども、そういう一例として今は見ていいんですか？

井出：そうなんですけれども、全然金にならないというんですよね。作ってはみたものの、これまでの旅行会社の収益を補えるようなレベルでは全然なくて、作ってもあんまり来ない。エルミタージュぐらいのコンテンツ力があっても来ないというのが分かりましたし、あとこういったオンラインツアーを作った場合に、参加者の人間関係をガイドのほうでファシリテーションしないと、あんまり楽しくないんですね。ツアーの楽しみというのは、ツアー参加者の間で世間話をしたりとか、自由行動時間に一緒に飯を食ったりとか、そういったツアー参加者の横のつながりみたいなものが、パッケージツアーの面白みのひとつでもあるんですが、そういったファシリテーションがオンラインツアーの場合はないので、オンラインツアーで人間関係もつくっていただいて、それでアフターコロナに備えてお客さん同士の交流とか、SNSとかを使ったりして盛り上げていくべきなんですけど、そこまでやっているケースがまだあんまりないように思います。

岡田：ツアーの中での添乗員って、すごくそういうケアをしながら回っていくわけけれども、空気感とかって全然分かんないですもんね。そういうところが難しいわけですね。あと無料、有料という話がありましたけれども、例えばミュージアムのデジタイズとかオープンデータ化とか、あとは写真撮影OKとかいろいろあって、そういうのって日本のミュージアムってめちゃめちゃ遅れているじゃないですか。そこはヨーロッパで従来から、例えばオープンデータ化とか、あるいはSNSに写真を上げるのはOKとかというのもあったけれども、それとはまた違って要はそういうガイドとかを入れていく上では有料というその辺のところですかね。

井出：そうですね。ガイドツアーは従来も有料になっていたところがあるので、お金を払って特別な知識を供給してもらうためのお支払いというのはあり得るかと思いますね。あと海外だと写真が撮れて日本だと写真が撮れないというのは、海外の教会の収蔵美術品なんかは、意識として神さまが持っているものという意識が強いそうなんですけれども、日本の京都の寺の中なんかは、ほとんど撮影ができないですよね。日本の場合、寺の財産は檀家^{だんか}のものという意識が強いので、住職ですら財産に対して決定権はないと聞きます。そうすると、欧米の教会や美術館などで、作品が写真に撮れるというのと、日本で仏教美術の作品が撮影できないというのは、宗教上の意識の差がかなりあると感ずることがあります。もう一つ日本の美術館、博物館の独特の慣行として、私人が持っている作品を寄託してもらって預かって美術館、博物館で展示しますけれども、そのときに著作権とか法律論とは全く無関係に預けた人の意向で写真撮影をさせるかさせないかというのが決まってしまうところが業界ルールとしてありまして、その意識改革で美術品を預けてくれる人をお願いをするというのは大事かと思えますね。

つい最近まで和歌山県立博物館では写真撮影ができなかったんですけれども、まさに関係者がオープンデータ化の努力をすることによって、少なくとも常設展に関しては写真撮影できるようになりました。作品を所有している方に対して、工芸品とか美術作品というのが人類共有の財産なんだという意識を持っていただくことによって、来場者が誰でも写真撮影できるようなミュージアムになっていくといいなと思います。

参考資料

- インパクの“失敗”を総括する そして消え去ったインターネット博覧会 <https://www.itmedia.co.jp/im/articles/0202/01/news001.html>
- 平成13年版 情報通信白書
- インターネット博覧会を再考する ― 博覧会とインパク、ネット文化とインパク ― 岡田 正樹 大阪観光大学観光学研究所年報『観光研究論集』第17号
- 前田恵理子 (2020) 「収束まで何年? 親の覚悟」最終閲覧日2020年5月15日, https://www.facebook.com/permalink.php?story_fbid=852867555198442&id=100014256153736
- 小川功 (2015) 「遊園地における虚構性の研究 ― 観光社会学からみた奈良ドリームランドの「本物」「ニセモノ」論」『彦根論叢』(404), 64-79
- 都築繁利・伊藤喜良 (2015) 「中世の熊野信仰と地域社会 (一) ― 中世における南奥羽新宮熊野社の復元を試みる」『日本経大論集』45(1), 1-16
- 井出明「COVID-19以後の観光学」『観光学術学会 2020年度研究報告要旨集』観光学術学会 (2020) pp36-37 http://jsts.sc/wp-content/uploads/2020/07/abstract_2020.pdf
- 井出明「「安・近・短」から「高・近・長」の旅へ」『コロナ新生活』大洋図書 (2020)